

第一章 浮舟の物語 浮舟、入水未遂、横川僧都らに助けられる

[第一段 横川僧都の母、初瀬詣での帰途に急病]

*そのころ(ところで常陸姫が入水した三月末頃の話ですが、その当時は)、*横川に(比叡山の横川に)、*なにがし僧都とか言ひて(恵信僧都と言って)、いと尊き人住みけり(とても優れたお坊さまが住んでいました)。*「そのころ」は注に<『完訳』は「そのころ一けり」の常套的な巻頭形式で、新たな話題を拓く。>とある。ただ、「常套的な巻頭形式」だからと言って、此処の「そのころ」の「その」は漠然とした場面設定を意図したものでは無い。言い換えに先立つ概要把握のために少し先読みを雑観すると、此処の話は常陸姫が入水した三月末の頃の事柄と知れる。即ち、此処の「そのころ」は<常套的な巻頭形式>と取るよりは、女房言葉独特の近い感覚で相手の付度を前提に、具体意を<省語した言い方>と取るべきものなのだろう。したがって現代語文に於いては、省かれた具体意を明示補語した方が正しい表記になるかと思う。*「横川(よかは)」は注に<横川は比叡山三塔の一つ。>とある。比叡山延暦寺のホームページに境内の全体地図イラストがあって、横川は雄琴駅に近い琵琶湖寄りのロケーションであることが示されている。*「なにがしそうづ」は注に<「なにがし僧都」は実名をぼかした呼称。『河海抄』は源信(『往生要集』の著者、恵信僧都)を指摘、その妹願西(願証尼・安養尼)も著名。>とある。源信(げんしん)は<942-1017、平安時代中期の僧。>と日本人名大辞典+にあり、紫式部の二世代くらい前の人のようだ。高名な僧なら伝説化が始まっていそうで、当時ならとてもタイムリイな話題だったのかも知れない。また、比叡山横川区域には今でも恵信堂(えしんどう)と言われる建物があると案内されている。ならばいっそ、どうせ語り草なのだから、此処でもこの「某僧都」を<恵信僧都>と言ってしまった方が興味があると独断する。

八十余りの母、五十ばかりの妹ありけり(その僧都には八十歳過ぎの母と、五十歳くらいの妹がいました)。古き願ありて(二人は古い願掛けの成就御礼に)、初瀬に詣でたりけり(はつせにまうでたりけり、大和の初瀬寺に参詣したのです)。睦まじうやむごとなく思ふ弟子の阿闍梨添へて(僧都は親しく重んじている弟子の阿闍梨を二人に付き添わせて)、仏経供養ずること行ひけり(ほとけきょうくやうずることおこなひけり、仏画や経典を先人供養に奉納させました)。

事ども多くして帰る道に(手厚い法事を終えての帰り道で)、*奈良坂と言ふ山越えけるほどより(奈良坂という山を越えた辺りから)、この母の尼君、心地悪しうしければ(この母の尼君が気分を悪くしたので)、「かくては(この調子では)、いかでか残りの道をもおはし着かむ(尼君はとても帰り着きなされない)」ともて騒ぎて(と従者たちが世話を焼いて)、宇治のわたり知りたりける人の家ありけるに、とどめて(宇治に知人の家があったので、其処に留まって)、今日ばかり休めたてまつるに(その日一日お休み頂いたが)、なほいたうわづらへば(依然としてとても苦しんでいた)、横川に消息したり(横川の僧都に母君の御病状を知らせました)。*「ならさか」は注に<奈良街道の大和国と山城国の境にある山。>とある。ざっと、京都府木津川市あたりらしい。

山籠もりの本意深く(僧都は山籠もり修行の意志が固く)、今年はお出でじと思ひけれど(今年はお下すまいと思っていたが)、「限りのさまなる親の(晩年の母親が)、道の空にて亡くやならむ(旅路に没しそうだ)」と驚きて(と驚いて)、急ぎものしたまへり(急いで宇治にいらっしやいました)。

惜しむべくもあらぬ人ざまを(惜しむほどでもない高齢な人を)、みづからも(僧都自身や)、弟子の中にも験あるして(また弟子の中にも効験のある者をして)、加持し騒ぐを(尼君の平癒祈願の加持祈禱を熱心に上げるのを)、家主人聞きて(いへあるじききて、その家の主人が聞いて)、

「*御獄精進しけるを(当家は御嶽参りに備えて謹慎生活をしているというのに)、いたう老いたまへる人の(とても高齢の人が)、重く悩みたまふは(重病で居るとは)、いかが(何とも、穢れが心配されます)」 *「御獄精進(みたけさうじ)」はく吉野の金峰山に参詣しようとする者が、参詣に先立つ前行として50日から100日の間、写経などをすること。>と大辞林にある。金峰山(きんぷせん)は修行の山で、其処への参詣は利益があるとして当時の流行だったような記事を夕顔巻だったかで見え気がする。

とうしろめたげに思ひて言ひければ(と迷惑そうに思っただけで)、さも言ふべきことぞ(それは尤もな言い分だと)、いとほしう思ひて(心苦しく思っただけ)、いと狭くむつかしうもあれば(とても狭く居心地も悪かったので)、やうやう率てたてまつるべきに(母君も小康を見たことから、そろそろお連れ出し申そうとしたが)、*中神塞がりて(方角が悪くて)、例住みたまふ方は忌むべかりければ(尼君がいつも住んでいらっしやる家は忌避されたので)、「*故朱雀院の御領にて(故朱雀院の御所領の)、宇治の院と言ひし所、このわたりならむ(宇治院というところがこの近くにあったはずだ)」と思ひ出でて(と思ひ出して)、院守(みんもり、院の管理人を)、僧都知りたまへりければ(僧都は知っていらっしやったので)、「一、二日宿らむ(ひとひふつかやどらむ、二日ばかりほど泊まりたい)」と言ひにやりたまへりければ(と従者をして言いに遣りなされたが)、 *「なかがみふたがりて」は箒木巻にあった<方違え>で、中神(なかがみ、天一神)は邪気を防ぐ神で、その神が居る方向は避けるという風習だったかと思う。その細かな計算をするのが陰陽道の一分野でもあるらしい。とにかく<方角が悪い>という言い方で道筋を変える、という知恵らしく、今さらは何とも上手い方便のようにも見えるが、夜の暗さに怯えた時代には非常に頼りになる意志決定の手段だったのかもしれない。 *「故朱雀院」は注に<以下「このわたりならむ」まで、僧都の推量。『完訳』は「源氏の兄。実在の朱雀院も重ねた表現。宇治院は朱雀院の別荘として伝領」と注す。>とある。末弟の式部卿宮さへ亡くなっているのだから、朱雀院は疾うに亡くなっているのだろうが、何ととっても、朱雀院は今上帝の父院であり、この物語に於いても相当に重要な存在だったのに、もしかすると、この人が故人であることの明示は是が最初かもしれないという情報の少なさだ。それが意外だし、全体にそういう説明不足が不満に感じられる。

「初瀬になむ、昨日皆詣りにける(管理人たちは初瀬寺に、昨日全員で参詣に出かけてしまったとのことです)」

とて(と言って遣いの従者は)、いとあやしき宿守の翁を呼びて率て来たり(ひどく貧相な留守番の老人を呼び出して連れて帰ってきました)。

「おはしまさば(お出でになるなら)、*はや、*いたづらなる院の寢殿にこそはべるめれ(どうぞ、空いている寢殿をお使い下さい)。物詣での人、常にぞ宿りたまふ(京から大和にお参りする人は、いつも其処をお使いなさいます)」 *「はや」は<さあ、どうぞ>くらいの常用句かと思う。 *「いたづら」は<無駄・無用→使われていない・空いている>。

と言へば(と、その老人が言うと)、

「いとよかなり(たいへん結構です)。*公所なれど(役所の管理建物だが)、人もなく心やすきを(人が居ないで気楽だ)」 *「おほやけどころ」は注に<朱雀院の別荘なので公領、初瀬詣での人々が宿泊した。蜻蛉日記の作者右大将道綱母も利用している。公共的宿泊所となっている。>とある。

とて(と僧都は言って)、見せにやりたまふ(弟子に様子を見せに行かせなさいます)。この翁(この留守番の老人は)、例もかく宿る人を見ならひたりければ(いつもこのような来客を見慣れていたので)、おろそかなるしつらひなどして来たり(簡単な部屋片付けを手早く済ませて一行を迎えに戻って来ました)。

[第二段 僧都、宇治の院の森で妖しい物に出会う]

まづ、僧都渡りたまふ(先に僧都が宇治院にお行きになります)。「いといたく荒れて(是はずいぶんと荒れて)、恐ろしげなる所かな(気味の悪い所だな)」と見たまふ(と、お思いになります)。「大徳たち(だいとこたち、大徳たちよ)、経読め(きょうよめ、魔除けの読経を上げなさい)」などのたまふ(と仰います)。

この初瀬に添ひたりし阿闍梨*と同じやうなる(今回の初瀬詣でに付き添った阿闍梨と同じくらいの別の高僧の二人が)、何事のあるにか(何か不審に思ったらしく)、つきづきしきほどの*下臈法師に、火ともさせて(その弟子として付き従っている修行僧に火を灯させて)、人も寄らぬうしろの方に行きたり(人も寄らない建物の裏の方に行きました)。森かと思ゆる木の下を(森かと思えるうっそうとした木の下を)、「疎ましげのわたりや(如何にも此処が魔物が潜んでいそうな怪しい所だ)」と見入れたるに(と調べると)、白き物の広がりたるぞ見ゆる(何か白い物が広がっているのが見えました)。 *「とおなじやうなる」の格助詞「と」は、上の「阿闍梨」を基準値と見做して<其に比較して>下に省語された(高僧)の身分が「同じやうなる」ということを示す比較基準値語用と、上の「阿闍梨」が下の「同じやうなる(高僧)」と<共に>という主格追加語用とが、復意されているようだ。一見した限りはとても分かり難い文で、理屈も少し面倒だが、語りを聞く分には、その語り手の意図が抑揚語調や息遣いから普通に伝わって、意外に文意が取れたのかも知れない。 *「げらふほふし」は<下郎法師>に聞こえて、「下郎」が身分の低い無資格者で、「法師」は法を説くに足る一定水準の僧侶だから、矛盾が有る変な言い方に思えるが、上臈・下臈の「臈(らう)」は元々が仏教用語で修行の年功をいう単位らしく、上臈が一定の修行を積んだ者、下臈が修行の足りない者、をいう言葉だったものが、

「臍」を「郎」と取り違えたか洒落たのか、上臍を広い一般的な意味での上級者、下臍をその下級者と語用されるようになったらしく、本来は此処にある狭義の<修行の浅い僧>という語用が正しいようだ。

「かれは、何ぞ(あれは何だ)」

と、立ち止まりて(と高僧が立ち止まって)、火を明くнаして見れば(灯りを近付けてみると)、物の居たる姿なり(誰かが座っている姿なのでした)。

「狐の変化したる(狐が変化しているのだろう)。憎し(小癩な)。見現はさむ(正体を暴いてやろう)」

とて、一人は今すこし歩み寄る(と言って一人の高僧は少し近付きます)。今一人は(もう一人の高僧は)、

「あな、*用な(いや、用心せよ)。よからぬ物ならむ(危ない物かもしれない)」 *「用(よう)」は普通<有用(役立つ)>と語用されるのだろうが、此処では高僧の語用であり、古語辞典に<「用」は「体」に対する概念で、物事を本体・本質から見るのではなく、作用・属性から見ること>のような説明があるので、ざっと<動くから危ない=用心しろ>という言い方をした、と取って置く。

と言ひて、*さやうの物退くべき印を作りつつ、さすがになほまもる(と言って、そのような魔性のものが引き下がるような結界の印を指で結んで陀羅尼を念じては、注意深くそのまま見守ります)。 *「さやうのものしりぞくべきいんをつくりつつ」は注に<『完訳』は「変化退散には、不動の印を結び、陀羅尼などを読む」と注す。>とある。陀羅尼(だらに)は古代インドの一地方原語らしく、日本などの外国に於いて、また外国人たる日本人にとっては、ワケの分からない呪文のようであっても、本来は具体意のある魔除けの言葉だったのだろう。でなければ、一定範囲の社会性を持って共有される論理構造文には成らないはずだ。その論理構造文を、ワケの分からない魔物という存在に対して、ワケの分からない呪文を唱えることで対抗し得ると期待する安心願望心理は、敗戦でアメリカ合衆国から物資援助を受けた日本に於いて続いている英語万能の思考停止状態に類似している。幸か不幸か、米国式の金融制度および技術開発は今に至るまで世界に君臨しつづけているので、その実質御利益は今もって有効であり、魔法が解けない限りは夢から覚めることはないし、覚める必要も無い。が、何時かは覚める、ともほとんどの人は察知していて、その察知は勿論、米国自体に於いてもあるだろうが、日本人である私は、その時に備えて、こうして改めて古文を読んでいる、という意識は当初から少なからずある。

*頭の髪あらば太りぬべき心地するに(頭の毛があれば逆立ちそうな不気味さだが)、この火ともしたる大徳(この松明を持った高僧は)、憚りもなく(物怖じもせず)、奥なきさまにて(無頓着な風に)、近く寄りてそのさまを見れば(近付いてその白い物を良く見ると)、髪は長くつやつやとして(髪は長く艶々として)、大きな木のいと荒々しきに寄りゐて(大木の太い根に寄り添っていて)、いみじう泣く(大泣きします)。 *「かしらのかみあらばふとりぬ」は注に<恐怖感をいう。僧侶は髪を剃っているので、諧謔を交えた表現。>とある。「ふとる」に<強くなる>という語感はあるが、恐怖に皮膚が収縮して<毛が逆立つ>ということまでの語意はなさそうで、毛が逆立

った結果、頭が大きく膨らんで見える>ということなのだろう。理屈抜きで絵が浮かべば面白いのだろうが、今さら滑稽さを狙った分だけ変に分かり難いかもしれない。

「珍しきことにもはべるかな(是は珍しいものだ)。僧都の御坊に御覽ぜさせたまつらばや(僧都様に御覽頂こうか)」

と言へば(と、その高僧が言うと)、

「げに、妖しき事なり(確かに怪しい)」

とて、一人はまうでて(と言って阿闍梨は僧都のところに参上して)、「かかることなむ(こういう次第です)」と申す(と申します)。

「狐の人に變化するとは昔より聞けど(狐が人に變化するとは昔から聞いているが)、まだ見ぬものなり(まだ私は見たことが無い)」

とて、わざと下りておはす(と言って僧都はわざわざ裏手にお出でなさいます)。

*かの渡りたまはむとすることによりて(母君たち一行が落ち着きなさるようには部屋を整え準備しなければならないので)、下衆ども(げすども、下働きの従者の)、皆はかばかしきは(働きの者たちは皆)、*御厨子所など、あるべかしきことどもを(台所の調理用具などを)、かかるわたりには急ぐものなりければ(庭内では急いで揃えていたところなので)、み静まりなどしたるに(裏庭は静まりかえっていて)、ただ四、五人して(高僧とその弟子の四、五人だけが)、ここなる物を見るに(その怪しいものを見ていたが)、変はることもなし(變化することはありません)。*「かの渡りたまはむとすること」は注に<尼君一行が宇治院に移ってくるということ。>とある。というか、その為の部屋片付けをしなければならない、ということなんだろう。*「みづしどころ」は御所や高家で言う厨房・台所。

あやしうて(不気味なので、手出しはせず)、*時の移るまで見る(そのまま一刻ほど見守っていました)。「*疾く夜も明け果てなむ(早く夜が明けてほしい)。人か何ぞと(人か魔物か)、見現はさむ(見極めなければ)」と(と僧侶たちは)、心にさるべき真言を読み(魔除けの真言を心中で唱え)、印を作りて試みるに(印を結んで破魔を試みると)、しるくや思ふらむ(正体が判明したらしく)、*「ときのうつるまで」は注に<一時は二時間。ここは長い時間の意。>とある。従って文意を取り、補語して意識する。*「とくよもあけはてなむ」は注に<以下「見現はさむ」まで、僧たちの心中の思い。『完訳』は「妖怪変化は、夜明けとともに、退散するか、力を失うとされる」と注す。>とある。

「これは、人なり(これは人なのだ)。さらに非常のけしからぬ物にあらず(決して異様な魔物などではない)。寄りて問へ(近寄って訊きなさい)。亡くなりたる人にはあらぬにこそ

あめれ(死人ではないようだ)。もし死にたりける人を捨てたりけるが(あるいは死んだ人を放置していたものが)、蘇りたるか(生き返ったものだろうか)」

と言ふ(と僧都が言います)。

「何の、さる人をか、この院の内に捨てはべらむ(誰が死人をこの院内に放置できましよう)。たとひ、真に人なりとも(たとえ本当に人だとしても)、狐、木霊やうの物の(狐や靈魂などの化け物が)、欺きて取りもて来たるにこそはべらめと(面白がって持ち運んできたものに違いないと)、不便にもはべりけるかな(不都合な事に存じられます)。穢らひあるべき所にこそはべめれ(この宇治院は不吉な場所なのでしょう)」

と言ひて(と阿闍梨は言つて)、ありつる宿守の男を呼ぶ(留守番の老人を呼びます)。山彦の答ふるも(その声が山彦になって聞こえるのも)、いと恐ろし(実に不気味です)。

[第三段 若い女であることを確認し、救出する]

妖しのさまに(老人は変な格好で)、*額おし上げて出で来たり(ずり下がった烏帽子を手で押し上げながら出て来ました)。 *「ひたひおしあげて」は注にく『完訳』は「烏帽子を上へずり上げた恰好。宿守の老人のやや滑稽なさまが、緊張した雰囲気をやわらげる」と注す。>とある。まあそうなんだろうが、「緊張した雰囲気」と言つても、読者にはこの「白き物の広がりたる」(二段)が入水した、というより、実際に入水したら衣服の重さで確実に溺れ死ぬだろうから、恐らくは入水する場所を探して宇治川沿いを人目を忍んでさまよう内に、遂に死に切れずにこの宇治院の裏手に迷い込んだらしい、常陸姫と知れているので、既に絶望から救われたような一種の安堵感があるのであり、またその生存を暗示する脚色としての‘呑気な父さん’の配役なのだろうが、私としては、この場面の生気なく泣き崩れる不審な女を取り囲む僧たちと留守番老人の取り合わせ設定が、当時の読者に一定の説得力を持って受け入れられたらしい実情があった、という蓋然性が興味深い。それにまた、姫が生きていたとしても、とても手放して楽観出来るような京都事情でないことは蜻蛉巻に示されていたので、多くの読者はその観点からも今後の展開に興味を持つだろう。その意味で、この老人の登場は確かに一種の救いには思える。まあいつでも、実際に世の中を動かすのは、庶民だろうと管理者だろうと、現に生命体として存在している人たちだ、というのは、限界であり救いなのだろう。

「ここには、若き女などや住みたまふ(この宇治院には若い女が住んでいらっしやいますか)。かかることなむある(こんなことになっていますが)」

とて見すれば(と阿闍梨は言つて、留守番老人にその不審者を見せると)、

「狐の仕うまつるなり(狐の仕業でしょう)。この木のもとになむ(この木の根元には)、時々妖しきわざなむしはべる(時々変なことをしでかします)。一昨年(を)の秋も(を)ととしのあきも)、*ここにはべる人の子の(この近所の人の子の)、二つばかりにはべしを(二歳ほどになる子(を)、取りてまうで来たりしかど(盗んで連れて参った時)、見驚かずはべりき(驚きません

でした)」 *「ここにはべるひとのこ」は注に<『集成』は「この院に仕えています人の子で」。『完訳』は「この辺におります者の子供で」と注す。>とある。『完訳』に従う。

「さて、その稚児は死にやしにし(それで、その子は死んだのか)」

と言へば(と阿闍梨が言うと)、

「生きてはべり(生きております)。狐は、さこそは人を脅かせど(狐はずいぶん人を驚かせますが)、ことにもあらぬ奴(実害の無い奴です)」

と言ふさま、いと馴れたり(と答える老人の様子は実に物慣れて興味薄です)。かの夜深き参りものの所に(邸内で夜食の準備をしている方に)、心を寄せたるなるべし(自分もありつけるかと、気を取られているようです)。

僧都(そうづ、僧都が)、

「さらば(そういうことなら)、さやうの物のしたるわざか(狐がさらってきたものかもしれない)。なほ、よく見よ(もっと良く確かめなさい)」

とて(と言って)、このもの懼ちせぬ法師を寄せたれば(その物怖じしない法師を近付けさせると)、

「鬼か神か狐か木霊か(お前の正体は鬼か神か狐か霊魂か)。かばかりの*天の下の験者のおはしますには(このような天下一の修験者がいらっしゃるからには)、え隠れたてまつらじ(隠し果し申せやしないぞ)。名のりたまへ(もう名乗りなさい)。名のりたまへ(さあ名乗りなさい)」 *「あめのしたのげんざ」は僧都を讃えて言い表した言い方らしい。

と(と、その法師は言って)、衣を取りて引けば(女の服を掴んで引くと)、顔をひき入れていよいよ泣く(女は顔を隠していっそう大泣きします)。

「いで、あな、さがなの木霊の鬼や(いや是は強情な魔物だ)。まさに隠れなむや(まだ隠れる気か)」

と言ひつつ、顔を見むとするに(と言って顔を覗き込もうとするが)、「昔ありけむ目も鼻もなかりける女鬼にやあらむ(昔話に言う目も鼻も無いというメオニかもしれない)」と、むくつけきを(と、内心怯えたが)、頼もしういかさまを人に見せむと思ひて(頼もしく勇ましいところを僧都に見せたく思って)、衣を引き脱がせむとすれば(掛け衣を引き剥がそうとすると)、うつ臥して声立つばかり泣く(女は声を上げて泣きます)。

「何にまれ(何れにしても)、かく妖しきこと(このような不思議な事は)、なべて、世にあらじ(先ず滅多に無い)」

とて、見果てむと思ふに(と言って、法師は正体を見定めようと思うので)、

「雨いたく降りぬべし(雨が強くなります)。かくて置いたらば(此処に置いていたら)、死に果てはべりぬべし(死んでしまうでしょう)。*垣の下にこそ出ださめ(そうなると当院が死穢に染まりますので、その前に、敷地の外へ出しましょう)」 *「かきのもとにこそいださめ」は注に<宇治院の築地塀の外に捨てよう、そうすれば死の穢れに触れずにすむ。>とある。「垣(かき)」は<区画を囲う=敷地の縁示>なのだろう。

と言ふ(と言います)。僧都(僧都は)、

「まことの人の形なり(是は本当の人の姿だ)。その命絶えぬを見る見る捨てむこと(その命が絶えそうなのを目の前で見捨てるなど)、いといみじきことなり(以ての外だ)。*池に泳ぐ魚、山に鳴く鹿をだに、人に捕へられて死なむとするを見て、助けざらむは、いと悲しかるべし(池に泳ぐ魚や山に鳴く鹿でさえ、人に捕まって死にそうなを見て助けなければ、あまりに情けないものだ)。 *「いけにおよぐいを〜」は注に<典拠未詳。深い慈悲心をいう。>とある。が、仏教に於いて不殺生の戒律があることは精進料理の下話として有名で、その根本戒律を典拠にできるだろうし、まして高僧の弁であってみれば、直接の典拠が無いとはとても信じられない。ただ、不殺生とは言っても植物も生命体なので、食物連鎖の中で生きる人類は土台、不殺生では生きられない。物質の酸化反応を基本的な運動エネルギーとして利用する動物だけが不殺生の対象になる、という認識は、動物の殺生によって同じ動物であるヒトが自分の物性を客観認識することで良くも悪くも得られてしまいそうな本質への価値観が、日常の社会制度構築に於いてはいちいち見直すのが面倒で、無視して置く方が都合が良い、という如何にももの方便に見えてしまう。いやしかし、方便は実は貴重な知恵だったりするが。

人の命久しかるまじきものなれど(人の命は長くはないものだが)、残りの命、一、二日をも惜しまずはあるべからず(残りの命の一日、二日でさえ惜しまない者は無いものだ)。鬼にも神にも、領ぜられ(鬼や神に支配されたり)、人に*逐はれ(ひとにおはれ、人に脅迫されたり)、人に謀りごたれても(人に騙されたりしても)、これ*横様の死にをすべきものにこそあんめれ(これらは非業の死をすることになるだろうが)、仏のかならず救ひたまふべき*際なり(慈悲深い仏が必ずお救い下さることになっている)。 *「おはれ」は「追ふ(追い込む、追い詰める)」の受身で<脅迫される>だろうか。 *「よこざまのし」は<本来の定めから横に逸れた死→非業の死・不慮の死=横死>。 *「きはなり」の「きは」はどういう語用か。「際」は<境目、限度、場合、身分>などの語用があるが、此処では「極まる(最終点に着く→決着する→決まっている)」の「極」かと思う。

なほ、試みに(まだ試しに)、しばし湯を飲ませなどして(少し湯を飲ませたりして)、助け試みむ(助けてみよう)。つひに、死なば、言ふ限りにあらず(それでも死んだら仕方の無いことだ)」

とのたまひて(と仰って)、この大徳して抱き入れさせたまふを(その法師に女を邸内に抱き入れさせなされるのを)、弟子ども(弟子たちは)、

「*たいだいしきわざかな(面倒なことだ)。いたうわづらひたまふ人の御あたりに(ひどく患っていらっしゃる母君の御近くに)、よからぬ物を取り入れて(性悪なものを招き入れては)、穢らひかならず出で来なむとす(災いがきつと起きるだろう)」 *「たいだいし」は<不都合である。怠慢である。以ての外だ。>などと古語辞典にある。が、此処での語用は僧都の判断を弟子たちが批評するのだから、論理上で<不都合だ、劣っている=間違っている>とは言えないはずで、自分たちの都合上で<迷惑だ、面倒だ>と言うくらいが順当に見える。ただ、「たいだいし」は語源や語感に捉え所の無い語なので、どうも是と言い切れるほどの手応えが無い。

と、もどくもあり(と僧都の処遇を避難する者もいました)。また(一方では)、

「物の変化にもあれ(物の怪の変化だとしても)、目に見す見す、生ける人を(みすみす目の前で生きている人を)、かかる雨にうち失はせむは(このような雨の中に放って置いて死なせるのは)、いみじきことなれば(あまりに無慈悲だろう)」

など、心々に言ふ(などと思ひ思ひに言います)。下衆などは(駆け出しの小坊主などは)、いと騒がしく(落ち着き無く)、物をうたて言ひなすものなれば(ものを大げさに言い触らすものなので)、人騒がしからぬ隠れの方になむ臥せたりける(人目につかない奥の部屋に女を寝かせたのでした)。

[第四段 妹尼、若い女を介抱す]

御車寄せて降りたまふほど(御車を寝殿に寄せて母君がお降りになる時に)、いたう苦しがりたまふとて(とても苦しがりなさるので)、ののしる(皆大騒ぎします)。すこし静まりて、僧都(それも何とか落ち着いて、少し静まると僧都は)、

「ありつる人、いかがなりぬる(先ほどの人はどうなりましたか)」

と問ひたまふ(と法師にお訊きになります)。

「なよなよとしても言はず(力なく何も言わず)、息もしはべらず(息もしていません)。何か(どうせ)、物にけどられにける人にこそ(物の怪に魂を抜かれた人でしょうから)」

と言ふを(と法師が答えて言うのを)、妹の尼君聞きたまひて(僧都の妹の尼君がお聞きになって)、

「何事ぞ(どうしたのですか)」

と問ふ(と訊きます)。

「しかしかのことなむ(実はこれこれこういうことがあった)、六十に余る年、珍かなるものを見たまへつる(六十歳を過ぎて、珍しいものを見申した)」

とのたまふ(と僧都が仰います)。うち聞くままに(妹尼はその話を聞いて)、

「*おのが寺にて見し夢ありき(私は亡き娘に会えると初瀬寺で夢見したのです)。いかやうなる人ぞ(それはどういう人なのか)。まづそのさま見む(とにかく様子を見せてください)」 *「おのが寺にて見し夢ありき」は注にく以下「そのさま見む」まで、妹尼の詞。長谷寺に参籠中に見た夢。>とある。で、この夢は亡くした娘と会うというものだったらしいことが下文に示される。此处ではその内容を明示していないが、娘を亡くした妹の事情を知っているであろう兄の僧都には、この言い方でその意味が通じたのだから、言い換えの現代語文としては左様に明示補語して置く。そうしないと、次の「泣きてのたまふ」の「泣く」があまりにも唐突で意味が取れなくなる。

と泣きてのたまふ(と感激に泣いて仰います)。

「ただこの東の遣戸になむはべる(すぐ其処の東の襖戸の裏に居ます)。はや御覽ぜよ(どうぞ御覧なさい)」

と言へば(と僧都が言うので)、急ぎ行きて見るに(妹尼は急いで行って見ると)、人も寄りつかでぞ(誰も側で見守っておらず)、捨て置きたりける(放り置かれていました)、いと若ううつくしげなる女の(とても若く可愛らしげなその女は)、白き綾の衣一襲(白い綾織の着物の重ね着に)、紅の袴ぞ着たる(赤い袴を着けて)、香はいみじう香うばしくて(焚き香は非常に香ばしく)、あてなるけはひ限りなし(この上なく上品な気配です)。

「ただ(まさにこれは)、わが恋ひ悲しむ娘の(私が見たいと恋い悲しむ亡き娘が)、帰りおはしたるなめり(帰っていらっしゃったものに違いない)」

とて(と妹尼は言って)、泣く泣く御達を出だして(泣きながら女房たちを呼び出して)、抱き入れさす(部屋に抱き入れさせます)。いかなりつらむとも(この女がどうなっていたのかも)、ありさま見ぬ人は(事情を知らぬ女房は)、恐ろしがらで抱き入れつ(恐ろしがらずに女を抱き入れます)。生けるやうにもあらで(生気は無かったが)、さすがに目をほのかに見開けたるに(それでも目をわずかに見開いたので)、

「もののたまへや(お話し下さい)。いかなる人か(あなたは誰で)、かくては、ものしたまへる(どうしてこうしていらっしゃるのですか)」

と言へど(と妹尼は言うが)、ものおぼえぬさまなり(女は何も分からないようです)。湯取りて(妹尼は薬湯を手にとって)、手づからすくひ入れなどするに(自ら女に飲ませようとするが)、ただ弱りに絶え入るやうなりければ(女は弱りきって死にそうだったので)、

「なかなかいみじきわざかな(此処でこの人を死なせては、いっそう娘を亡くした悲しみが辛くなる)」とて(と妹尼は思って)、「この人亡くなりぬべし。加持したまへ(この人は死にそうです。救命祈禱を上げて下さい)」

と、験者の阿闍梨に言ふ(と修験者の阿闍梨に言います)。

「*さればこそ(こういう面倒な事になるから、関わりなさらぬように申し上げたものを)。あやしき御もの扱ひ(妙な僧都さまの御取り計らいだ)」 *「さらばこそ」は下に<出さむと聞こえれ>などが省語されているのだろう。先の法師の弁に「垣の下にこそ出ださめ」(三段)とあった。

とは言へど(と法師は言ったが)、*神などのために経読みつつ祈る(神のご加護を願って般若心経を唱えて祈ります)。 *「かみなどのため」は注に<『集成』は「神分といて、祈禱の前に『般若心経』を読む。悪神邪神を退け、善神の加護を願う趣旨」と注す。>とある。私は『般若心経』を知らないし、今のところは興味も無いが、単に「経読み」と言うよりは<『般若心経』を読み>と言った方が少しは具体性が増して、分かったような気分になる。

[第五段 若い女生き返るが、死を望む]

僧都もさしのぞきて(僧都も様子を見に来て)、

「いかにぞ(どうなっている)。何のしわざぞと(何が取り憑いているのか)、よく*調じて問へ(魔物をよく祈り伏せて、こうなった訳を問え)」 *「調ず(てうず)」は<取り調べる。取り揃える。調理する。>などとあるが、仏教用語では<魔物を制圧する=調伏(てうぶく)する>という語用らしい。

とのたまへど(と仰るが)、いと弱げに消えもていくやうなれば(女はとても弱っているように死にそうなので)、

「え生きはべらじ(もうだめだろう)。すぞろなる*穢らひに籠もりて(思いがけずに死穢に触れて謹慎するとなると)、わづらふべきこと(困るな)」 *「けがらひにこもりて」は注に<死穢は三十日間の忌籠もりとなる。>とある。「死穢(しえ)」は<死者に触れた汚れ>で、直接死体に触れた者だけでなく、同じ结界内・敷地内にいた者は一定期間外部との接触を避けるという風習ないし規制で、恐らくは感染症への恐怖から取られた処置が大元にあるのだろう。であれば、神官のお祓いで清められるというのは、逆にちょっと怖い。

「さすがに(それにしても)、いとやむごとなき人にこそはべるめれ(とても高貴な人のようです)。死に果つとも(死んだとしても)、ただにやは捨てさせたまはむ(簡素に葬れはなされますまい)。*見苦しきわざかな(身寄りを調べて葬儀を整えるとなると、世話焼きに手間取ることになる)」 *「みぐるし」は<みっともない。見た目が悪い。>だが、此処での「見る」は<面倒を見る>で「苦し」は<苦勞になる=大変だ>という語感なのだろう。一言で<不都合だ>と言っても意味は通りそうだが、「ただにやは捨てさせたまはむ」を受ける言い方なら<不都合だ、面倒だ>は不遜過ぎる。

と言ひあへり(と法師たちは言い合っていました)。

「あなかま(静かに)。人に聞かすな(他の女房に聞こえます)。わづらはしきこともぞある(話が広がっては面倒です)」

など口固めつつ(などこの場の者に口封じして)、尼君は(姉の尼君は)、親ひたまふよりも(親が患っていらっしやることよりも)、この人を生け果てて見まほしう惜しみて(この人を生き返らせてみたいと大事に思って)、*うちつけに添ひみたり(そのままその場に付き添っていました)。 *「うちつけに」は<場当たり次第に=そのまま>。

知らぬ人なれど(その女は知らない人だが)、みめのこよなうをかしげなれば(見た目がこの上なく美しいので)、いたづらになさじと(死なせまいと)、見る限り扱ひ騒ぎけり(その場で見守る者は皆手厚く世話します)。さすがに、時々(すると時々)、目見開けなどしつつ(女は目を開けては)、涙の尽きせず流るるを(涙が止め処なく流れるのを)、

「あな、*心憂や(まあ、気の毒な)。いみじく悲しと思ふ人の代はりに(てたまらなく愛しく思う娘の代わりに)、*仏の導きたまへと思ひきこゆるを(初瀬観音仏の御慈悲が私をあなたに会わせてくださったと思ひ申しますのに)。かひなくなりたまはば(あなたが亡くなってしまつては)、なかなかなることをや思はむ(却つて悲しさが募ります)。さるべき契りにてこそ(御縁があつたればこそ)、かく見たてまつらめ(こうしてお会いできたのですから)。なほ、いささかものたまへ(どうか、何か言つて下さい)」 *「こころうし」は<厭だ。不愉快だ。>でもあるが、そういう自身の気持ちを言うのは「憂し」の方が直接的だ。「心憂し」は、むしろ<情けない。心苦しい。>という事態を不都合と認識していることを示す語用が多いようで、であれば、この語こそが「いとほし(懸念される)」という語より、よほど<気の毒だ>という言い方に近いように見える。 *「ほとけのみちびきたまへる」は注に<長谷寺の観音。>とある。

と言ひ続くれど(と尼君は言い続けたが)、からうして(女はやつと)、

「生き出でたりとも(生き返つても)、あやしき不用の人なり(私はもうこの世には見苦しいだけの無用の者です)。人に見せで(誰にも知らせずに)、夜この川に落とし入れたまひてよ(夜にこの宇治川に投げ落としてください)」

と、息の下に言ふ(と息の下に言うばかりです)。

「まれまれ物のたまふをうれしと思ふに(珍しく物を仰るのを嬉しく思えば)、あな、いみじや(何と情けない言を仰いますか)。いかなれば、かくはのたまふぞ(どうしてそんなことを仰るのですか)。いかにして、さる所にはおはしつるぞ(どうしてあんな裏手にいらっしやつたのですか)」

と問へども(と尼君が問へども)、物も言はずなりぬ(女は何も答えません)。「*身にもし傷などやあらむ(身体の不具を悲観したのか)」とて見れど(と思つて尼君は女の身体を調べてみたが)、ここはと見ゆるところなくうつくしければ(何処と云つて不備は無く美しいので)、

あさましく悲しく(死に急ぐ女の気持ちに情けなく悲しく)、「まことに、人の心惑はさむとて出で来たる仮のものにや(法師が言うように、この女は本当に人の心を惑わそうとして現れた化身のものかもしれない)」と疑ふ(と疑います)。 *「みにもしきずなどやあらむ」は注にく姉尼の心中の思い。『集成』は「からだにあるいは不具のところでもあるのか。若い女のことなので気をまわす。「疵」は、欠陥の意」。『完訳』は「身体的欠陥。一説には怪我」と注す。>とある。

[第六段 宇治の里人、僧都に葬送のことを語る]

二日ばかり籠もりみて(僧都一行は宇治院に二日ばかり滞在して)、二人の人を祈り加持する声絶えず(母君と拾った若い貴女の二人の平癒祈願で経文を唱える声が絶えず)、あやしきことを思ひ騒ぐ(不思議な事があるものと思ひ落ち着きません)。

そのわたりの下衆などの(宇治の村人で)、僧都に仕まつりける(以前に僧都に仕えていた者が)、かくておはしますなりとて(僧都が宇治院にいらっしゃるということで)、とぶらひ出で来るも(挨拶しに出て来て)、物語などして言ふを*聞けば(世間話をするのを聞くと)、*「聞けば」ということは、僧都は直接この下衆と話しているのではなく、下衆が女房たちと話しているのを近くで聞いている、という舞台設定らしい。

「故八の宮の御女(こはちのみやのおおんむすめ)、右大将殿の通ひたまひし(うだいしゃうどののかよひたまひし)、ことに悩みたまふこともなくて(特にご病気ということもなく)、にはかに隠れたまへりとて(急死なさったということ)、騒ぎはべる(此処の辺りは今騒いでおります)。その御葬送の雑事ども(そのおおんさうさうのざふじども、その御葬送の細々としたお手伝いを)仕うまつりはべりとて(お仕え申しまして)、昨日はえ参りはべらざりし(昨日は参上申せませんでした)」

と言ふ(と言います)。「*さやうの人の魂を(その女の魂を)、鬼の取りもて来たるにや(鬼が拐って此処に運んで来たのだろうか)」と思ふにも(と女を本物の人だと思ふにしても)、かつ見る見る(実際に女を見てみると)、「あるものともおぼえず(生きていようには思えず)、危ふく恐ろし(怪しくて不気味だ)」と思す(とお思いになります)。 *「さやうの人」とは、どうやら下衆の言う「右大将殿の通ひたまひし、故八の宮の御女」が助けた女らしい、と僧都が気付いた、ということの意味するのだろう。しかし、僧都はその村人にくそれらしい女を助けた>という事情を話さなかったらしい。確かに、村人は「御女」が「にはかに隠れたまへりとて」「その御葬送の雑事ども仕うまつりはべり」と言っているので、女を助けたことは<単に失踪者を見つけた>ということにはならなさそうで、いろいろと面倒な事も懸念されるので、変に話を切り出せない、ということではありそうだが、女を助けたことは「二人の人を祈り加持する声絶えず」とあったことから、固い秘密でもなかったようでもあり、常陸姫発見が宇治村では噂にも立たなかったらしい事に少し違和感を覚える。

人びと(姉尼の女房たちは)、

「昨夜見やられし火は(昨夜此処から見えた野辺の送り火は)、しかこととしきけしきも見えざりしを(そのように大将がなさるような大きな葬送には見えませんでした)」

と言ふ(と言います)。

「ことさら事削ぎて(特別に簡素にしたので)、いかめしうもはべらざりし(盛大ではありませんでした)」

と言ふ(と村人は言います)。穢らひたる人として(葬儀に出て穢れた人ということで)、*立ちながら追ひ返しつ(女房たちはその村人を着座させずに早々に帰したのでした)。*「たちながらおひかへしつ」は注に<死穢に触れないため、庭先に立たせたままで、室内に上げない、座らせない。「追ひ返す」は早々に帰らせた意。>とある。主語は僧都というよりは、女房たちとした方が良いのかもしれない。女房たちは女が裏庭で発見された事情を知らないということなので、女を物の怪と疑っていたのは僧都と法師と数人の弟子と留守番老人と妹尼に限られていたとすれば、女はこの宇治院にいた妹尼の縁者くらいに一行の多くは思っていて、だから村人の話にも女を八宮女とは思わなかった、という理屈が成立しそうだ。だから、死穢を嫌って村人を早々に帰したし、村人に常陸姫発見は伝えられなかった、という経緯が割と無理なく説明できそうだ。しかし、読者が此処まで物語の合理性を整理しなければならないという作者の筆致は如何なものか。文意の分かり難さは主語の省語だけに因るものではないだろう。舞台設定自体があまりに説明不足だ。私が編集者なら落第点で書き直させる。

「大将殿は(大将殿に於かれては)、*宮の御女持ちたまへりしは(宮の御息女の妻になさっていた人は)、亡せたまひて、*年ごろになりぬるものを(亡くなって数年になるはずなのに)、誰れを言ふにかあらむ(誰のことを言っているのだろう)。姫宮をおきたてまつりたまひて(正妻でいらっしゃる帝の姫宮を差し置き申しなさって)、よに異心おはせじ(よもや浮気はなさらないでしように)」 *「みやのおおんむすめもちたまへりし」は注に<宇治八宮の大君。>とある。「持つ」は「心に持つ」なら<恋心を抱く>になるかもしれないが、「御女持つ」だと<御女を妻にする=結婚する>という言い方になりそうだ。薫殿は宇治姉君と結婚するには至らなかったはずだが、外見的には結婚したものと見做されていたらしい。中納言という高い身分で姉君の看病と死穢謹慎で数ヶ月間も宇治に籠もっていたのだから、世間一般にはそう見えて当然だ。が、この物語は薫殿の視点から語られる事が多いので、こういう一般認識は新鮮だ。 *「としごろ」は注に<死後三年目。『集成』は「亡くなったのは年立の上では四年前(通説、三年前)のこと」と注す。>とある。宇治姉君が没したのは総角巻七章一段に「見るままにも隠れゆくやうにて消え果てたまひぬる」とあって、薫中納言 24 歳の 11 月くらいだった。今は薫大納言兼右大将 28 歳の 3 月だろうから、姉君の死は丸三年と五ヶ月ほど前のことであり、確かに「年立の上では四年前」に違いなく、なぜ(通説、三年前)となるのか全く不可解だ。この年立ては、何も推論による一結論なのではなく、総角巻～早蕨巻～宿木巻～東屋巻～浮舟巻～蜻蛉巻、そして当手習巻に至る経緯の中で本文に明示されているものだ。

など言ふ(などと女房は言います)。

[第七段 尼君ら一行、小野に帰る]

*尼君よろしくなりたまひぬ(母尼が回復なさいました)。方も開きぬれば(方蓋がりも解けたので)、「かく*うたてある所に久しうおはせむも便なし(このような異様な所に長居なさる必要は無い)」とて帰る(ということで一行は帰ります)。*「あまぎみ」は母君にも妹君にも使う呼び方なので、分かり難い。まあ、文意からこの「尼君」は<母尼>と分かるが、分かって当然のように話を進める作者の神経が分からない。*「うたてあり」は<物事の進行に支障がある→異様だ。難がある。>みたいな言い方らしいが、それというのも迷い込んだ女(常陸姫)を拾ったからだろうに、その女を残して行くならともかく、連れて行くとしたら、化生は女ではなく宇治院の方にあるという理屈で女を除霊再生させる、という方向に話は進むことになりそうだ。この辺はどういう方便も使えるので、問題は論理を貫徹する意志・意向の強さの有無になるのだろう。

「この人は、なほいと弱げなり(この人は今だに弱々しそうです)。道のほどもいかがものしたまはむと(帰りの道中も難儀だろうと)、心苦しきこと(心配です)」

と言ひ合へり(と女房たちはその無気力な女の事を言い合っていました)。車二つして(車は二台で)、老人人乗りたまへるには(老人の僧都と母君がお乗りの車には)、仕うまつる尼二人(お仕えする尼女房が二人同乗し)、次のにはこの人を臥せて(次の車には妹尼がこの人を寝かせて)、かたはらにいま一人乗り添ひて(隣には介添えの女房尼をもう一人乗せて)、道すがら行きもやらず(道中もはかどらず)、車止めて湯参りなどしたまふ(車を止めて薬湯を差し上げたりなさいます)。

比叡坂本に(尼君たちは比叡山の山下の)、小野といふ所にぞ住みたまひける(小野という所に住んでいらっしやったのです)。そこにおはし着くほど、いと遠し(宇治から其処に帰り着きなさるまでは、ずいぶん遠いのです)。「ひえさかもとにをのといふところに」は注に<比叡山の西坂本の小野。>とある。此处で言う「小野」がJR湖西線の「小野駅」辺りを言うのなら、この「比叡坂本」は<比叡山の山下>という言い方なのだろう。湖西線の「比叡山坂本駅」は山科から三つ目で、横川に近い「雄琴温泉駅」よりも一つ手前であり、「小野駅」は山科から六つ目、「坂本駅」から三つ先だ。因みに、路線案内で奈良線の宇治駅から湖西線の小野駅までの所要時間を調べたらほぼ一時間で料金は740円だった。牛車で休み休みだと、どれくらいの時間を要したのだろう。それに第一、それだけの旅を自由にできる権利も資金も普通の人には無かったんだろう。

「中宿りを設くべかりける(仮宿を考えるべきだった)」*注に<一行の詞。普通の旅では不要。病人が出たので必要性を感じた。>とある。「なかやどり」は途中で一泊する旅宿。

など言ひて(などと言って)、夜更けておはし着きぬ(夜更けになって到着しました)。

僧都は、親を扱ひ(僧都は親を世話し)、*娘の尼君は、この知らぬ人をはぐくみて(妹尼はこの知らぬ人を庇って)、皆抱き降ろしつつ休む(それぞれ車から抱き下ろして休みます)。老いの病のいつともなきが(老いた母君が病気がちなのは今に限ったことではないが)、苦しと思ひたまへし遠道の名残こそ(苦しく思いなされた遠路の疲れで)、しばしわづらひたまひけれ(しばらく気分がお悪かったが)、やうやうよろしうなりたまひにければ(次第に回復な

さったので)、僧都は登りたまひぬ(僧都は山を登って横川にお帰りなさいました)。 *「むすめのあまぎみ」という言い方は人物の特定に於いては分り易い言い方だが、「僧都は」と始まる文で「親を扱ひ」とは続くものの、その「親」の「娘」という属性で<妹尼>を呼ぶのは、視点転換の感性が現代語文とは、少なくとも私とは、ずいぶん違う。

「*かかる人なむ率て来たる(身元の知れない若い女の病人を連れて来た)」など(などということ)、法師のあたりにはよからぬことなれば(俗世を断った身の法師の修行場には相応しくないことなので)、見ざりし人にはまねばず(僧都は女の事を他の者には知らせません)。尼君も、皆口固めさせつつ(妹尼も皆に口封じさせたが)、「もし尋ね来る人もやある(もしかすると、どこかで噂を聞きつけて、この人を探しに来る人がいるかもしれない)」と思ふも、静心なし(という気もして落ち着きません)。「いかで、さる田舎人の住むあたりに(どうしてあの田舎者が住む宇治に)、かかる人*落ちあふれけむ(こういう高貴な人がさまよっていたのか)。物詣でなどしたりける人の(初瀬詣でなどに京から出かけた人が)、心地などわづらひけむを(気の病にでも罹ったのを)、継母などやうの人の(継母のような意地悪な人が)、たばかりて置かせたるにや(騙して置き去りにしたのだろうか)」などぞ思ひ寄りける(などと考えてみます)。 *「かかるひと」は注に<瀬死の女を連れて来た、ということ。>とある。が、「法師のあたりにはよからぬ」という理由付けとしては、与謝野訳文の<身もとの知れない若い女の病人>の方が、男の興味を引く面白さがあるかと思う。 *「落ちあふる」は<落ちこぼれる→さまよう>あたりか。

「川に流してよ(川に流してほしい)」と言ひし一言より他に(と言った一言以外に)、ものもさらに*のたまはねば(女は一切何も仰らないので)、いとおぼつかなく思ひて(妹尼はとても捉え所無い思いで)、「いつしか*人にもなしてみむ(早く娘のように世話したい)」と思ふに(と思うが)、*つくづくとして起き上がる世もなく(元気無く無表情で起き上がる時も無く)、いとあやしうのみものしたまへば(ずっと不可解なままでいらっしやるので)、「つひに生くまじき人にや(やはり死んでしまうのだろうか)」と思ひながら(と思うものの)、うち捨てむもいとほしういみじ(見放すには忍びないので)、*夢語りもし出でて(尼君は女に初瀬寺での夢見の話も聞かせて)、初めより祈らせし阿闍梨にも(初めから祈らせていた阿闍梨にも、引き続き)、忍びやかに*芥子焼くことせさせたまふ(人目を避けて回復祈願の護摩焚きをさせなさいます)。 *「のたまはねば」は注に<主語は浮舟。『完訳』は「女への敬語の初出。身分ある女と察する妹尼の気持の反映。逆に妹尼に敬語がつかないのは、彼女の心中に即した語り口による」と注す。>とある。妹尼は常陸姫を亡き娘の形代にしたいので、貴女として敬語遣いするのだろう。常陸姫はどこまでも<身代わり>なのだろうか。 *「ひと」は妹尼が初瀬観音で夢見した人であり、それは「わが恋ひ悲しむ娘」と四段に語られていた。 *「つくづくと」は<思い詰めたように無反応でいるさま→生氣なく無表情>あたりだろうか。 *「夢語りもし出でて」は注に<長谷寺で見た夢の話。妹尼がなぜこんなに大切に世話をするのか理由が人々に初めて明かされる。>とある。が、妹尼は夢見の話は何故<人々に>話す必用があるのか。是を聞かせた相手は常陸姫だろう。もっと言えば、「うち捨てむもいとほしういみじ」で句点とせず、これを理由項として、読点で下に続ける構文と見るべきだ。 *「芥子(けし)」は古語辞典に<ケシの種。護摩を焚くのに用いる。>とある。